

研究ノート

マレー人とは誰か

—境界に立つインド系ムスリム住民の視点から—

中 島 咲 寧 *

Malay Boundaries Reconsidered: Perspectives of Indian Muslim Citizens on the Borderline

NAKAJIMA Sakine*

The concept of Malay in Malaysia is said to have lost its inherent fluidity in the process of modernization and transformed into a fixed ethnic category. However, the outer boundaries are still not clear, as evidenced by the cultural definition of Malay in the Constitution. This paper examines the evolution of the Malay concept and its background, focusing on the Indian Muslim citizens who have been oscillating across the Malay/Indian ethnic boundaries. Before the colonial period, when Malay was an inclusive concept with kingship and Islam at its core, they could be included in this category. However, when the penetration of colonial administration gradually fixed the concept of Malay, and when the debate over “Who is a Malay?” began along with nationalism, they were excluded from the Malay category because of their exoticism. Nevertheless, when postwar political changes shifted Malay nationalism toward “the establishment of Malay superiority,” they were once again included in the Malay category as they supported this position. Their current situation, which still wavers on the borderline between the Malay and Indian, reveals that the outer boundaries of Malay for those on the borderline are still ambiguously fixed, since the process of fixation of Malay boundaries has always proceeded with the differentiation of the immigrant groups, Chinese and Indian.

1. はじめに

本稿は、マレーシアにおける「マレー人 (Malays)」という民族範疇の形成過程をインド系ムスリム住民 (Indian Muslims)¹⁾ の視点から再検討することを通じて、植民地期以前から現

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

2022年11月18日受付, 2023年2月28日受理

代に至るまでの当地域におけるマレー人概念の変遷とその背景を考察するものである。

マレーシアは一般的に、マレー人・華人・インド人の3大民族から成る多民族国家と説明される。この多民族状況がイギリス植民地統治下における中国・インドからの大規模な労働者の流入を経て形成されたことは周知のとおりである。そして、人口調査や民族別政策といった植民地行政の浸透と共に当地域に住む人々が範疇化され、次第にマレー人・華人・インド人という民族範疇が固定化していった。またその過程で、元来は伝統的王権の下に位置づけられる人を緩やかに包括する開放的かつ流動的な集団概念であったマレー人は、華人やインド人といった移民集団に対する「土着民」として差異化され、固定的な境界をもつものとしてその流動性を失っていったと説明されてきた [Hirschman 1987; Shamsul 1996]。

しかし、現在の憲法に定められたマレー人の定義は「イスラームを信仰し、習慣上マレー語を話し、マレーの慣習 (*Adat*) を守る」²⁾ という、後天的に獲得可能、かつ極めて文化的な条件によって規定されていると同時に、別の箇所では独立時点でマラヤ（現在のマレーシア及びシンガポール）で生まれた者及びその子孫とされ、血統の要素も含まれており、その外縁は未だ明確ではない。³⁾ 本稿は、マレー人の文化的定義に着目するが、インド系ムスリム住民は、こうした文化的な定義を満たし得るが故に、インド人とマレー人という2つの民族範疇の境界を揺れ動いてきたのである。

マレーシアにおけるインド系住民といえば、植民地期にプランテーション労働者として流入したタミル系ヒンドゥーの人々にルーツをもつ集団をイメージする人も多いだろう。一方、本稿が着目するインド系ムスリムは、その流入のルーツを植民地期以前に主に南インドとマレー半島の間で交易を行っていたムスリム商人にまで遡る。マレー半島への定住化が進む中でマレー語やイスラームといったマレー性を定義づける文化的な条件を満たしてきた彼らは、マレー人概念が元来の流動性を失い固定化された民族範疇へと変化していく過程において、マレー人範疇への包摂と、インド人という民族的他者としての排除を繰り返し経験してきた。本稿では、こうした境界に立つ彼らの視点から、マレー人という民族範疇の形成過程を逆照射し、再検討することを試みる。

マレー人という民族範疇の形成過程に関係する先行研究としては、上述したもの以外にも、

-
- 1) 本稿では、インド系ムスリムの中でも、その大多数を占める南インドのベンガル湾沿岸部（現在のタミル・ナードゥ州）にルーツをもつタミル系のムスリムに焦点を当てている。よって本文中ではインド系ムスリム/タミル系ムスリムという2つの呼称を文脈に応じて使い分けるものの、基本的には互換可能なものとして使用する。
 - 2) 以下、憲法の記述については、鳥居・竹下 [1996] の解説と翻訳を参考にしている。
 - 3) なお、当該箇所である連邦憲法 160 条第 2 項では、「(a) 連邦あるいはシンガポールにおいて、独立記念日以前に出生し、あるいは両親のいずれかが連邦またはシンガポールで出生しており、あるいは独立記念日において連邦またはシンガポールに居住している；あるいは (b) 以上のものの子孫」という文言があり、血統の要素も含まれている。本稿では主にマレー人を定義づける文化的側面に着目するが、同条項における定義にはマレー性の起源をどこまで遡るのかという論点が含まれていることにも留意する必要がある。

戦前の植民地期後期にみられたマレー人意識の高まりと、その主張が依拠するマレー性 (Malayness) の模索に焦点を当てたマレー・ナショナリズム研究 [Milner 2002 (1995); Omar 2015; Roff 1994] や、植民地政府による対マレー人政策とそれに対応する現地社会との相互作用に焦点を当てた研究 [坪井 2011, 2013; 左右田 2018] が挙げられる。本稿では、植民地期の社会変動に着目した以上の研究も参照しつつ、植民地期以前のマレー人概念の様相や、戦後から現在までの展開も含めたより広いタイムスパンにおけるマレー人概念の変遷を、その過程におけるインド系ムスリム住民の位置づけの変化に着目しながら概観していきたい。

本稿の構成は次のとおりである。まず第2節では、マレー人範疇の形成過程とそれに関する議論を、時系列に沿って整理する。第3節では、その過程におけるインド系ムスリム住民の位置づけの変化を、王国の時代、植民地統治期から戦前まで、戦後から現在までの3つの時代区分に沿って概観する。第4節ではそうした位置づけの変化を踏まえたうえで、インド系ムスリム住民の視点から見たマレー人概念の変遷とその背景を考察する。

2. マレー人とは誰か—マレー人範疇の形成過程

上述のように、本来的なマレー人概念とは、伝統的な王権秩序に基づく開放的かつ流動的な緩やかな集団概念であった。それが、その後の植民地統治下における移民集団の流入と、人口調査や民族別政策などの植民地行政を通じて、固定化された近代的な民族範疇へと変化していく。本節では、そうしたマレー人範疇の形成過程を時系列に沿って整理する。

2.1 植民地期以前

マレーの原語であるムラユ (*Melayu*) という語の使用は7世紀頃からみられ、当時それはスマトラ南部を中心とした文化的統一性をもつ地域を指す言葉として使用されていた [石川 1997: 140]。その後15、16世紀頃に書かれた文書の記録では、ムラユはスマトラのパレンバンやマラッカの王族またはその関係者を意味する狭義の意味を指すものとして使用されるようになった [富沢 2003: 27; 吉野 2002: 89]。田村 [1991: 38] は、こうしてムラユが各王朝の血統に連なる子孫を表す言葉となり、王に忠誠を尽くす人々がムラユの子達 (*Anak Melayu*) と呼ばれるようになったことから、当時のマレー人概念が、王とのパトロン＝クライアント関係にある人々の血縁的集団アイデンティティを表す言葉であったことを説明している。一方で、東南アジア島嶼部一帯でイスラーム化が進み、イスラームが王権を支える政治的権威として確立するのに従い、18世紀末以降のマレー世界ではムスリムに改宗すること (*Masuk Islam*) がマレー人に成ること (*Masuk Melayu*) を意味するようになった [加藤 1990: 238]。そしてこの時代以降、マレー人概念が王への忠誠とイスラームの信仰により定義づけられるようになり、徐々に血縁的紐帯の概念から離れて拡大していった [Nagata 1984: 12]。ミルナーは、王に忠誠を誓う臣民から構成されるマレーの伝統的な政治体制をクラジャアン (*Kerajaan*)

と呼び、それがマレー人全体を代表するような共通の祖先観を共有することがなかったことを強調している [Milner 1982: 1-2]。こうした植民地期以前のマレー人概念を巡る考察からは、当時のマレー半島におけるマレー人概念が、各王国の王を頂点とした階層秩序と、イスラームという宗教的権威に基づく、他者に開放的な包括概念であったことがわかる。

2.2 植民地統治下

一方で、こうした民族概念の在り方も、植民地統治の始まりとその統治の浸透と共に大きく変化した。18世紀半ばから19世紀初頭にかけてペナン、シンガポール、マラッカを獲得したイギリスは、1826年にこれら3港を海峡植民地とした。また、以降はそれら3港を足場にマレー半島の面的支配に乗り出し、1874年にペラとの間で結ばれたパンコール条約 (Pankor Engagement) を皮切りに、マレー半島への政治的介入を進めていった。その後、1896年の連合マレー州 (Federated Malaya States) の結成に伴い、その他の州が非連合マレー諸州 (Unfederated Malay States) としてまとめられると、マレー半島全域をイギリスの直接・間接的支配下に置く本格的な植民地支配体制が完成した。先に述べたパンコール条約を皮切りとした政治的介入とは、イギリスによる政治・経済の支配と引き換えに、イスラームとマレーの慣習に関する事物の管轄権を王に委ね、そこに法的根拠を与えるという性格のものであった。ここから富沢 [2003: 33-36] は、このパンコール条約こそが、マレー人を「マレー語、イスラーム、王権 (ラジャ/スルタン)」の3つの柱によって定義づけられる民族として固定化するうえで重要な契機を果たしたと指摘している。

19世紀後半以降、マレー半島に流入した中国人・インド人の労働者がマレー人と同じ植民地行政の枠組みに組み込まれるようになると、植民地官吏へのマレー人の優先的登用を定めたマレー人官吏制度 (Scheme for Employment of Malays in Public Service) や、マレー人に対する保留地の区画設定を行なうマレー人保留地法 (Malay Reservation Act) にみられる親マレー人政策 (Pro-Malay Policy) の実施を通じて、マレー人は「(移民集団に対して) 保護を受けるべき土着民」として差異化されていった [坪井 2011, 2013].⁴⁾ またこの差異化の過程において、マレー人とは誰かを法的な規定によって明確にする必要が生じ、現行憲法の規定に続く「マラヤの人種のいずれかに属し、マレー語もしくはマラヤのいずれかの言語を日常的に話し、イスラームを遵守するもの」という定義が初めて誕生した [坪井 2013: 78]。こうしてマレー人は、マレー語とイスラーム、そして移民集団に対する土着性という要素をもつ集団として「名づけ」⁵⁾ られ、他集団から差異化されていった。

4) その他、植民地行政を通じたマレー人性の固定化と、マレー人・華人・インド人という民族範疇の構造化に関する議論としては、人口調査の変遷を通じてその様相を論じたハーシュマン [Hirschman 1987]、民族別政策の施行が与えた影響について論じたシャムスル [Shamsul 1996] などの研究がある。

5) 本稿における「名づけ」「名乗り」の指す意味については内堀 [1989] の議論を参考にしている。

そして、この「名づけ」を受容した人々による「名乗り」によって、マレー人概念は今日我々が使用する民族概念と同様に切実な意味合いをもつものへと変化していく。ミルナーはこの過程を、1907年創刊のマレー語新聞『ウトゥサン・ムラユ』(*Utusan Melayu*)紙の編集長、立法参事会(Legislative Council)のマレー人代表を務めたモハメッド・ユーノス・アブドゥラ(Mohd. Eunus Abdullah)を例に挙げて説明している[Milner 1998: 156]。ミルナーは、ユーノス自身が、かつては各小王国の王と臣民という小規模範囲のアイデンティティとして存在していた王宮文化であるクラジャアンを、マレー人全体の伝統的慣習と捉えたうえで、そうした独自の伝統の下に結合・凝集される民族集団としてマレー人を定義づけようとした点に着目する。これは、マレー人を規定する重要な要素のひとつとして王権を捉えたイギリス側からの「名づけ」に対するマレー人側からの応答とも捉え得るものであり、こうした当事者からの「名乗り」を通じて、マレー人概念は徐々に近代的な民族範疇として確立していった。

2.3 戦後から現代まで

第二次世界大戦後、植民地統治に復帰したイギリスによって、当地域における国民国家建設に向けた準備が進められていくと、その法的地位を巡る議論において、マレー人という集団はより明確に他集団と区別されていく。1946年には、シンガポールを除く海峡植民地とマレー半島部を統合するマラヤ連合(Malayan Union)構想が発表された。しかし、その内容がスルタンの権限縮小やマレー人への優遇廃止を定め、各エスニック集団に平等な権利を認めるものであった故に、既得権層を中心としたマレー人社会から強い反発を受けた。こうしたマレー人の政治意識の高揚を受けたイギリスは、マラヤ連合案を撤回し、1948年にスルタンの主権の保証とマレー人の特権の維持を定めたマラヤ連邦(Federation of Malaya)を成立させた。この決定は華人社会の猛反発を招き、ゲリラ戦の展開と共にその鎮圧を目的とした非常事態宣言が発表され、その後12年間(1948年～1960年)続いた。その間、1957年にマラヤ連邦が独立を果たすと、同年に採択された憲法においてマレー人の定義(第160条)及びマレー人の特別な地位(第153条)が正式に定められた。また1969年に生じた民族間暴動を受け、貧困の撲滅と民族間の経済格差是正を目的とした新経済政策が1971年に開始されると、マレー人を含むブミプトラ(*bumiputera*;土地の子)に対する教育や雇用の場面におけるより具体的な優遇措置が強化された。

このような法的地位の運用面における他集団との明確な区別に目を向けると、確かにマレー人概念が植民地統治とその後の国家建設の過程を経て、本来的な開放性や流動性を失っていったという説明も理解できる。しかし冒頭でも述べたとおり、こうした法的地位における他集団との明確な区別とは裏腹に、マレー人を定義づける条件はイスラーム・マレー語・慣習法という極めて文化的なものが中心であり続けてきた。つまり、マレー人が近代的な民族範疇として

ある程度確立した現代に至っても、その外縁は未だ不明瞭なままに据え置かれているのである。次節では、こうしたマレー人概念の変遷の過程にインド系ムスリム住民がどう位置づけられてきたのかを、時系列に沿って論じていく。

3. マレー人とインド系ムスリム—その包摂と排除

インド系ムスリムとマレー人の関係の変化を論じていく前に、マレー半島におけるインド系ムスリム住民の概要と、その歴史的背景について簡単に整理しておきたい。

まず、現在のマレーシアにおけるインド系ムスリム住民の人口規模は、2010年度の国勢調査の結果によると約8万人⁶⁾とされている [MC 2010]。しかし、マレーシアの人口統計における民族範疇の選択は自己認識に基づくものであり、インド系ムスリムの人々の中には「マレー人」を選択する人と「インド人」を選択する人が混在するため、その正確な人口を知ることが難しい [Nagata 2006: 517]。一方で、マレーシア全体での人口については、マレーシア全国のインド系ムスリム団体を総括するマレーシア・インド人ムスリム同盟 (*Persekutuan Indian Muslim Malaysia*; 以下, PERMIN) は約50万人、またマレーシア・イスラーム開発省 (*Jabatan Kemajuan Islam Malaysia*; JAKIM) は約80万人と推定していることが他の研究では指摘されている [Chuah *et al.* 2011: 218]。⁷⁾

マレー半島における彼らの歴史は、9世紀頃、インド洋交易の活況の中で南インドのコロマンデル海岸からクダ王国に流入したムスリム商人にまで遡る。マレー王国のイスラーム化に従い勢力を強めた彼らはその後マラッカへ移動し、西欧諸国の覇権の推移に応じる形でアチェやリアウへ、そしてイギリス東インド会社による開港に伴いペナン、シンガポールへと中心地を移動させ、その都度各港市に拠点を築いてきた [Khoo 2014; Fujimoto 1988]。現在そのコミュニティはマレーシア国内、主にマレー半島西岸部の各地に分散しているが、最も大規模で歴史のあるコミュニティが存在するのはペナン州の州都ジョージタウンとされている。⁸⁾

以下ではこうした歴史的背景を踏まえ、当地域における彼らとマレー人概念との関係の変遷について、マレー王国の時代、植民地統治期から戦前まで、戦後から現在まで3つの時代区分に分けて説明していく。

3.1 マレー王国とインド系ムスリム

まず、王国の時代について見ていく。前近代東南アジアの港市国家において、その首長たる王の権力は、外部勢力との間で行なわれる交易の管理を通じて得られた富や政治・文化的威信

6) この数字は、マレーシアの全インド人人口に占めるムスリムの人口を指す。センサスに表れないインド系ムスリム住民の様相については、4節にて説明する。

7) なお、チュアら [Chuah *et al.* 2011: 218] は、これらの推定が2007年時点のものとしている。

8) 本稿が参照するマレー半島におけるインド系ムスリム住民に関する研究 [Fujimoto 1988; Khoo 2014; Nagata 1974] は、いずれもペナンにおけるコミュニティをその対象とするものである。

に由来するものであった [弘末 2004: 6]. また15世紀におけるマラッカ王のイスラームへの改宗以降, イスラームが王権を支える正統的な政治権威となり,⁹⁾ こうした政治体制の下, 多言語を操り, かつ貿易にも長けたインド系ムスリム商人たちは, 宮廷と外の世界との間で商業・外交における仲介者としてマレーの王の下で重用された. 彼らはシャーバンドル (*Syabandars*; 港務長官) やブンダハラ (*Bendahara*; 宰相), サウダガル・ラジャ (*Saudagar raja*; 王の商人) として, または王室書記や通訳として重要な役割を果たし, その中にはマレー王族や貴族の女性との通婚を通じて高い政治的地位を得る者もいた [Khuo 2009: 98; Fujimoto 1988: 11–17].¹⁰⁾ フジモトは, マラッカにおいて少なくとも2人のスルタンがタミル系ムスリム商人の子孫であったことなどから, 当時の王室にてタミル系ムスリムが強い影響力を保持していたことを指摘している [Fujimoto 1988: 17].

前節で見たとおり, この時代のマレー人は, 王権の階層秩序とイスラームの宗教共同体に基づく包括概念であった. この点において, 彼らがインドに出自をもちタミル語を駆使して商売を行なうムスリム商人であることと, マレーの王の下に仕え, 時には王族の一員とも成り得るマレー人であることは何ら矛盾するものではなく, 当時の彼らがマレー人概念の中に包摂され得る存在であったことがわかる.

3.2 植民地統治とインド系ムスリム

次に, 植民地統治の時代について見ていく. 18世紀後半以降, 当地域における貿易拠点の獲得に乗り出したイギリスは, 1786年にクダ王国からペナン島を, 1819年にはジョホール王国からシンガポールを割譲させた. また, 1824年の英蘭条約によってマラッカを獲得すると, 1826年にこれら3つの港をイギリス直轄の海峡植民地とし, 自由貿易港とした. 1511年のポルトガルによるマラッカ陥落, 1641年のオランダによる同地を含む周辺の港の占領と貿易独占政策を受け, 安定的な交易活動が可能な拠点を模索していたインド系ムスリム商人たちは, イギリスによる自由貿易港の開港の流れに乗じ, 海峡植民地を中心に拠点を築いていった [Fujimoto 1988: 18–19, 27–29, 63–64].¹¹⁾

こうした時代背景の中, 彼らが拠点を築いた港市は, イギリス人官僚が支配する空間へと変化した. それに伴い彼らの存在は特定の王権に忠誠を誓う臣民としてのクラジャアンから切り離され, マレー人概念と彼らを巡る関係も大きく変化した. その好例となるのが, 近代マレー

9) 東南アジア島嶼部におけるイスラーム化の起源には諸説あるが, 南インドからマレー半島に流入したムスリムによる地元女性との通婚が, マレー半島の諸王国におけるイスラーム化において重要な役割を果たしたと指摘もある [Fujimoto 1988: 3–4, 6; Khuo 2009: 98–99].

10) クーは, 娘たちを王族と結婚させ自らは王室顧問として働く裕福なタミル系ムスリムの役人を表す言葉としてママック・ムントゥリ (*Mamak Menteri*; 叔父の大臣) という語が使用されていたことを指摘している [Khuo 2009: 98].

11) ペナンは開港直後より英領インドの東方居留地とされて移動の安全が確保されていたこともあり, インドからの商人を多く引き寄せたとされる [Khuo 2009: 102; Fujimoto 1988: 28].

文学の父とも称されるムンシ・アブドゥッラー (Munshi Abdullah) である。アラブとインドに出自をもつムスリムであり、イギリスとオランダの支配が拮抗する 18 世紀末のマラッカに生まれた彼は、マラッカとシンガポールにてイギリス人官僚の下でマレー語通訳兼教師として働き、いかなるクラジャアンにも属さなかった。こうした日常的なイギリス人との交流の中、西洋近代の「人種」概念を受容した彼は、マレー世界とヨーロッパ世界の間に立ってそれを相対化し、マレー人概念をクラジャアンという個別的な帰属意識ではなく、より広い人種的統一性として捉えようとした。[Milner 1998: 154–156]。彼の自伝『アブドゥッラー物語 (*Hikayat Abdullah*, 1849)』を訳した中原 [1980: 303] はその解説において、彼が「イスラムという絆、マレー語という絆によってのみ、マレー人としての意識をもっていた」と説明する。¹²⁾ このように、イギリスが支配した海峡植民地においては、「人種」概念を受容した外来出自をもつムスリムたちによって、王権という狭小な帰属意識から独立したマレー人概念が新たに形成されていった。

こうした様相は、開港直後より多くのムスリム商人が流入したペナンやシンガポールにて顕著であった。ペナンとシンガポールでは、アブドゥッラーと同様に、アラブ系・インド系のムスリムである父親と地元生まれの母親との間に生まれた混血の子孫たちや、それら外来ムスリムの両親の下で育った地元生まれの子孫たちが多く存在していた。彼らは、ジャウイ・プカン (*Jawi Pekan*) またはジャウイ・プラナカン (*Jawi Peranakan*) と呼ばれ、一般的なマレー人とは異なる集団として認識されていた。¹³⁾ アラブやインドから来た商人の親の元に生まれ、マレー語・タミル語等の語学能力に長けた彼らは、特に 19 世紀の前半から半ばにかけて、イギリス人官僚の下で事務員や通訳として雇われるなど比較的高い社会的地位を占めていた [Khoo 2014: 123; Roff 1994: 48–49]。

一方で、イギリスが半島部の政治的支配に乗り出した 1874 年以降、そうした現地人官吏としての職業に就くべき人種が土着民としての「マレー人」に対してのみ求められていくようになると、そのカテゴリは次第に淘汰されていく。その様相は人口調査¹⁴⁾ にはっきりと表れており、1871 年、1881 年時点でマレー人やインド人と並ぶ独立したカテゴリとして存在していたジャウイ・プカンは、1891 年とそれに続く 1901 年の調査で「マレー人及びその他島嶼部

12) その根拠として中原は、作中で彼がマレー語を語る時には「我々の言葉」という一方で、「我々マレー人は」という表現を使うと同時に「彼らマレー人は」という表現を使うことを指摘している [中原 1980: 302]。

13) 一般的には、南インドやアラブを中心とした地域出身の外来ムスリムの父親と、地元人女性との間に生まれた混血の子孫たちと定義される [Khoo 2014: 121; Roff 1994: 48]。一方、1931 年度の人口調査の報告書からはこのカテゴリがマレー人と混血した事実のないインド系ムスリムの定住者にも適用されていたことが指摘されており [Vlieland 1932: 73–74]、ここでは混血の有無にかかわらず、「外来 (特に南インド) に出自をもつ地元生まれのムスリム」という広義の意味で使用する。

14) 英領マラヤにおける人口調査は、1871 年より海峡植民地にて始まり、10 年ごとに行なわれた。1901 年からは連合マレー州でも開始され、1921 年以降は海峡植民地・連合マレー州・非連合マレー諸州を含む英領マラヤ全体でひとつのセンサスが取られるようになった [Hirschman 1987: 559]。

出身者」の大カテゴリの下に位置づけられ、1911年を最後にセンサス上から姿を消す [Hirschman 1987: 571–574; Nagata 1974: 337; Fujimoto 1988: 40–41]。この背景についてクーは、親マレー人政策にみられるマレー人の定義が彼らにとって十分に適用可能な定義であった以上、彼らが自らをマレー人として登録する利点は明白であり、かつてジャウィ・プカンを自称した人々が次第にマレー人を名乗るようになったと説明している [Khoo 2014: 127]。こうして海峡植民地に生まれた南インドに出自をもつムスリムたちは、植民地行政がマレー人を土着民として差異化していく中で、自らをマレー人として位置づけていった。

しかし20世紀初頭以降にナショナリズムの機運が高まると、彼らによるマレー人性の主張は疑問視されることになる。都市部在住で比較的高い社会的地位を占めた彼らは、19世紀末から20世紀初頭にペナンやシンガポールで活発に設立された多くのムスリム組織において、指導者的立場を独占していた。またそれら組織を起点に、マレー語ジャーナリズムやイスラーム改革運動を展開し、マレー人ナショナリズムを先導していった [Fujimoto 1988: 133; Roff 1994: 184].¹⁵⁾ その嚆矢といえるのが、シンガポール在住のアラブ系やインド系ムスリムを中心に1906年に創刊された月刊誌『アル・イマーム (Al-Imam)』である。改革主義思想の流れを汲む本誌は、マレーの王や伝統的指導者層の腐敗を批判し、普遍的なイスラームの実践を通じた社会改革と、それによるマレー人の統一を主張した [Fujimoto 1988: 110–112; Omar 2015: 17–19, Roff 1994: 56–57]。また、同様にイスラーム改革主義の思想をもつアラブ系やインド系ムスリムによって1928年に創刊されたマレー語新聞『サウダラ (Saudara)』は、読者投稿欄を中心とした寄稿者グループを母体に、1934年にはペナンを本拠地にマレー語の使用を通じたマレー人の統一を主張するマラヤ・ペンフレンド同胞会 (*Persaudaraan Sahabat Pena Malaya*) を設立し、半島部にも支部を広げて活動を展開した [Fujimoto 1988: 144–148; Roff 1994: 212–213]。

しかし、1930年代より半島部出身のマレー人エリートたちによるナショナリズムが本格化すると、自らをマレー人とするジャウィ・プカンらの主張は、その外来出自や大多数のマレー人に比べて高い社会的地位を根拠に、マレー人内部からの批判の対象となっていく。たとえば前述したアル・イマームを創設したグループにみられる主張は、半島部における王権を中心とした旧来秩序の中での伝統的イスラームに固執するマレー人指導者層との間で激しく対立し反発を受け、やがて衰退した [Fujimoto 1988: 111–112; Roff 1994: 220, 255–256; 多和田 2005: 75–79]。また、マラヤ・ペンフレンド同胞会は、活動の拡大と共に半島部支部のマレー人に

15) ロフは、初期のマレー語ジャーナリズムは、主にシンガポール在住の地元生まれのインド系ムスリム及びジャウィ・プカンによって担われたものと説明している [Roff 1994: 48]。マレー半島で初となるマレー語 (アラビア文字表記) 新聞、『ジャウィ・プラナカン (*Jawi Peranakan*, 1876–1895)』も、シンガポール在住のジャウィ・プカン知識人らによって創刊されたものである [Khoo 2014: 319; Roff 1994: 49]。

よるペナン本部のジャウイ・プカンの指導者たちに対する敵対心が高まり、結果的に組織全体におけるペナン本部の役割は弱体化した [Fujimoto 1988: 148-149; Roff 1994: 220-221; Omar 2015: 24]. こうした出自や血統を根拠に彼らをマレー人範疇から締め出そうとする世論が生じていたことは、当時の言論界の指導的人物であり、「マレー人ジャーナリズムの父」と呼ばれた、アブドゥル・ラヒム・カジヤイ (Abdul Rahim Kajai) による DKK (*Darab Keturunan Kling*; インドの血), DKA (*Darab Keturunan Arab*; アラブの血) といった差別的な用語の創出からも読み取れる [Roff 1994: 220].¹⁶⁾ また、1939年にクアラルンプールにて開催された各地域に点在したマレー人組織にとって初の全国会議 (National Congress) において、ジャウイ・プカンを指導者とするペナン・マレー協会 (Penang Malay Association) の参加が拒否されたことも、その象徴的な出来事といえるだろう [Fujimoto 1988: 149-151; Roff 1994: 242]. こうして1930年代後半、マレー人ナショナリズムが高まりをみせる中で、インド系ムスリムをその出自や血統を根拠にマレー人範疇から排除しようとする機運が高まった。

3.3 国民国家マレーシアとインド系ムスリム

一方で、その後彼らは完全にマレー人社会から排除されてしまったのかといえば、そういう訳でもない。1930年代後半のマレー人ナショナリズムは、ロフ [Roff 1994] がそう論じたように、各州 (王国) の結束を越えて統合された全国規模の民族運動には至らぬまま、道半ばで第二次世界大戦へと突入した。その後、日本軍の支配・撤退を経てイギリスがマラヤの植民地政策に復帰すると、その植民地統治の方向性の転換と共にマレー人意識を巡る彼らの立ち位置にもまた変化が生じていく。

1945年にイギリスは、戦前に認めてきたマレー人への特権を廃止し、半島の住民に民族の区別なく平等な市民権を認めるマラヤ連合構想を発表した。この構想はいわば、イギリスが華人やインド人ら移民集団を将来のマラヤを担う国民として正式に認め、マレー人と同等の立場に置くという認識への転換であった [井口 2018: 182-186]。そしてこの認識の転換は、戦前には「マレー人とは誰か」を巡って争われたマレー人のナショナリズムの方向性を、移民集団が分母に含まれることを前提に、「いかにマレー人の優位性が確保される形での独立を達成するか」を争点とするものへと変化させていった [水島 1998: 275]。

上述のように、戦前のナショナリズム期におけるインド系ムスリムを含むジャウイ・プカンによるマレー人性の主張は、その外来性や大多数のマレー人に比べて高い社会的地位を背景に、批難・排斥の対象となってきた。一方戦後はこうした状況の変化の中、主に知識人・宗教

16) 1930年代の定期刊行物におけるマレー人性の議論を巡る言論の分析を行なった坪井は、カジヤイが初代編集者を務めたマレー語新聞『マジュリス (*Majlis*)』が、スマトラ、ジャワなどオランダ領東インド (現在のインドネシア) の島々に出自をもつ外来マレー人 (Foreign Malays) は「同胞」としてマレー人側に包摂されるべきと主張したことを示している。こうしたことから、当時のマレー人ナショナリストたちの間でマレー人性の根拠として出自や血統を重要視する見方が広がっていたことがわかる [坪井 2016: 14-18]。

的指導者層から成り、自らを含むマレー人の地位向上を唱えた彼らのリーダーシップを拒絶することへの合理性はなくなっていったものと考えられる。¹⁷⁾ 1946年に発足したマラヤ連合に対するマレー人社会からの猛反発は、同年の統一マレー人国民組織 (United Malays National Organization; 以下, UMNO) の結成に繋がり、こうしたマレー人の政治意識の高揚を受けたイギリスの譲歩により、マレー人の特権的地位の回復と非マレー人住民に対する制限付きの市民権付与を定めたマラヤ連邦が結成された。その過程において、主にペナン在住のインド系ムスリムやジャウィ・ブカンの指導者たちが主導権を握るムスリム団体らは、UMNOを中心とするマレー人社会と連携してマラヤ連合への反対運動を展開したが [Shanker 2001: 41], フジモト [Fujimoto 1988: 154-155] が指摘するように、そのような彼らのリーダーシップに戦前のような批判が向けられることは無くなり、戦前にみたような対立構造は緩和され、インド系ムスリム住民は再びマレー人範疇へと包摂され得る存在となった。

一方でそれは、以降全てのインド系ムスリム住民たちが自らをマレー人として位置づけ、またそうすることによってしか政治参加を行なえなくなったということの意味する訳ではない。1940年後半～1950年代前半の間、各民族集団に準拠する政党が相次いで結成され、その主導権を握るマレー人政党のUMNO、マラヤ華人協会 (Malayan Chinese Association; MCA)、マラヤ・インド人会議 (Malayan Indian Congress; MIC) から成る連立政党の連盟党が政権を維持することで民族間の取引を制度化する体制が確立し、1957年の独立以降にも続いた。1957年の独立時点で、インド系ムスリムの政治家たちは既にUMNOに加盟しており、UMNO・タンジョン (UMNO Tanjong) と呼ばれるタミル語で会議を行なう地方支部を展開して政治参加を行っていた [Stark 2006: 389]。しかし、1971年の新経済政策 (New Economic Policy) 以降、マレー人 (ブミプトラ) の優位性が以前に比べ更に顕著な形で表れてくると、1972年に連盟党に代わり成立した国民戦線 (*Barisan Nasional*; 以下, BN) 下のUMNO内部でマレー人と密接な関係にありつつ、その陰に追いやられている現状を不満に感じていたインド系ムスリム党员らにより、1979年にマレーシア・インド人ムスリム会議 (*Kongres Indian Muslim Malaysia*; 以下, KIMMA) が結成された [Stark 2006: 389]。

こうして、インド系ムスリム住民が独立した政治的発言権を獲得することを目的に結成されたKIMMAは、1980年代後半から1990年代末にかけて、全マレーシア・イスラーム党 (*Parti Islam Se-Malaysia*; 以下, PAS) や民主行動党 (Democratic Action Party) 等の野党と協力し、UMNO率いるBNと対峙する姿勢を取った。しかし、野党同士の方針の違いや政党内部での

17) インド系ムスリムを含むジャウィ・ブカンの人々とマレー人性を巡る論争に関する考察は多くの場合で戦前のナショナリズム期までを対象としたものに限定されており、戦後以降のそうした論争の行方については述べられていない。ここでは、植民地政策の方向転換という歴史的背景と、フジモト [Fujimoto 1988] やシャンカー [Shankar 2001] の記述を参照し、推論的に戦後におけるマレー人社会への包摂の流れを説明している。

勢力争いを背景に選挙で結果を修めることは出来ず、KIMMA が野党側の一政党として発言力をもつことはなかった。その後、1999 年選挙時における PAS との対立を機に野党との共闘路線を諦めた KIMMA は、一転して BN への支持と UMNO への参加の意思を表明した [Stark 2006: 389]。当時、PAS への対抗として、マレー人の団結が最優先事項として掲げられていた UMNO は、その民族的性格が不明確な KIMMA の加盟申請を当初拒否したが [Stark 2006: 390]、6 度の申請を経て遂に 2010 年に KIMMA は UMNO の準会員としての立場が認められた [Pillai 2015: 32]。一方で、2018 年選挙での BN の下野に伴い UMNO の影響力が低下すると、2019 年には KIMMA に代わる独立政党としてマレーシア・インド系ムスリム統一党 (*Parti Indian Muslim Bersatu Malaysia*) が設立された。¹⁸⁾ インド系ムスリム住民らによるこうした政治参加の在り方からは、戦後以降の三大民族の住み分けを前提とした選挙政治の中で、彼らがマレー人として、またはインド系ムスリムとしての 2 つの顔を使い分けながらその発言の場を確保しようとしてきたことが理解できる。

以上、植民地期以前から植民地統治期、そして独立から現代までの時系列に沿って、マレー人概念の変遷とそこにおけるインド系ムスリム住民の位置づけの変化について見てきた。以下では、こうした彼らの位置づけの変化から、マレー人概念の変遷とその背景を考察していく。

4. 「マレー人」再考

ここまで見てきたとおり、当地域にマレー人という民族範疇が形成されていく過程において、インド系ムスリム住民たちはマレー人社会への包摂と排除を経験してきた。しかしその包摂と排除の歴史を王国の時代から現在までの幅広い時間軸の中で捉えた時、それらはどちらか一方に永続的に向かっていくような決定的なものではなかったといえるだろう。つまり、彼らをマレー人範疇に彼らを含み入れるか否かは、植民地期にマレー人概念の固定化が始まって以降も、曖昧なまま推移してきたのである。

この現状をより理解するうえで、3 節の冒頭で示した人口統計上のインド系ムスリム人口と、関係諸団体における推定人口との間のギャップに着目することが有効であろう。上述のとおり、現在のマレーシアにおけるインド系ムスリム人口の中には、国勢調査において自らの属性として「マレー人」を選択する人と「インド人」を選択する人が混在しており、¹⁹⁾ その結果から正確な人口を把握することが出来ない。一方、2010 年センサスにおける「全インド人人口中のムスリム人口」が約 8 万人であるのに対し、諸団体が推定する人口は 50 万、または

18) 同政党は 2020 年には全国インド・ムスリム連盟党 (*Parti Perikatan India Muslim Nasional*) に改名して現在も活動を続けている [Malaymail 2021]。

19) 具体的には、出生登録時に民族 (*keturunan*) をマレー人、宗教 (*agama*) をイスラームと登録する人と、民族をインド人、宗教をイスラームと登録する人の 2 パターンがある。

80万人となっており、²⁰⁾ これらのギャップからは、国内におけるインド系ムスリム人口の大多数が、センサス上ではマレー人として計測されている状況が読み取れる。また、各州に存在するインド系モスク (*Masjid India*)、その周辺に立ち並ぶ両替商や宝石商、また全国でみられるママック料理店 (*Mamak*)²¹⁾ 等のエスニック・ビジネス、また上述の PERMIN やマレーシア・インド人ムスリム商工会議所 (*Malaysian Indian Muslim Chamber of Commerce and Industry* : MIMCOIN) 等の全国規模の団体が、そうした少なからぬ「センサス上ではマレー人として計測されるインド系ムスリム」によって成立していることを踏まえると、マレー人とインド系ムスリムの間の線引きの曖昧さが理解できる。

また、ペナンをフィールドに、人々の流動的、状況可変的な民族アイデンティティの表現に着目したナガタ [Nagata 1974] は、マレー人との社会的連帯または社会的距離を示すことを目的に彼らがマレー人性とインド系ムスリム性の使い分けの事例を挙げている。そこでは、日常的にタミル語を話し、インド系ムスリムとして振る舞う男性が、「インド系ムスリムは商売上手でずる賢い」というステレオタイプから逃れるために、商売上の取引で何か問題が生じた時に「私たちマレー人はそんな振る舞い(ずる賢い行い)は出来ない」と発言し、自らをマレー人側に位置づけたという事例などが挙げられている [Nagata 1974: 342].²²⁾ 上述の公的な民族属性と日常的な民族志向のズレや、ナガタが挙げたその都度における可変的な民族アイデンティティ選択の事例からは、彼らが日常的にマレー人/インド人の境界を揺れ動くことが可能な程に、マレー人範疇の境界が曖昧なものとして認識されていることが理解できる。

こうしたインド系ムスリム住民の視点からマレー人概念の変遷とその背景を再検討して見えてくるのは、マレー人概念が民族範疇として固定化が、華人や(ヒンドゥー教徒が多数を占める)インド人といった移民集団との間の外縁を確定することを第一義として進行したということである。

本来マレー人概念は王権の階層秩序とイスラームの信仰に基づく開放的で包括的な概念であり、それ故に多様な出自をもつ人々を内包してきた。そうした前近代の特徴をもつマレー人概念が、植民地行政や国民国家建設の過程を経て本来の流動性を失い、ある程度固定化された近代的な民族範疇へと変化していったことは事実であろう。しかし、そうしたマレー人概念の近代化は往々にして、「土着民」たるマレー人と、移民集団で完全な民族的他者である華人・インド人との差異化において進行していった。故に、マレー語を話し、イスラームを信仰しながらも外来出自をもつ、いわば「土着民」と移民集団の中間にあったインド系ムスリムのような

20) これらの数字の出典については、第3節を参照。

21) タミル系ムスリムによって経営される食堂。テ・タレ (*Teh Tarik* : ミルクティー) やナシ・カンダー (*Nasi Kandar*) といった、インド系ムスリムに特徴的な食事を提供する [Duruz and Khoo 2015: 67].

22) ナガタ [Nagata 2006: 537] はインド系ムスリム住民によるこうした実践を、「マレー人とインド人という2つの生活世界・アイデンティティの間を揺れ動く (oscillating)」という言葉で説明している。

人々は、そうした差異化の過程で自らをマレー人の側に位置づけることが出来たといえよう。

「マレー人とは誰か」が模索されたナショナリズムの時代には、その答えを出自や血統に見出そうとする人々が現れた。その時点においてインド系ムスリムによるマレー人性の主張はその外来性を根拠に批判の対象となり、彼らを民族的他者としてマレー人範疇から排除しようとする機運が高まった。しかし、戦後のマレー人ナショナリズムが華人・インド人に対するマレー人の政治的優位の確立を争点とする性格を強めるようになると、インド系ムスリムは彼らがマレー人の優位を支持する限りにおいてマレー人範疇に包摂され得る存在となった。ここで彼らは、またもマレー人/インド人の境界を揺れ動く存在となったのである。

国民国家建設の時代以降、三大民族の住み分けを前提とする政治制度が確立していく中で、彼らは時にはマレー系政党の UMNO と協力し、時には独自政党を立ち上げる等、マレー人/インド系ムスリムとしての顔を使い分けながら発言の場を確保してきた。また、公的な民族的属性や日常実践における自己表象においても、自らのマレー人性とインド系ムスリム性を多面的に使い分けながら生活してきた。こうした状況からは、彼らのようなマレー人の周辺に位置づけられる人々にとって、マレー人範疇の外縁が状況に応じた出入の余地を残すものとして存在していることが読み取れるだろう。²³⁾

5. おわりに

本稿の目的は、マレーシアにおけるマレー人という民族範疇の形成過程を、その信仰と出自の属性によって、マレー人とインド人という2つの民族範疇の境界に立たされてきたインド系ムスリム住民の視点から再検討することを通じて、植民地期以前から現代に至るまでの当地域におけるマレー人概念の変遷とその背景を考察することであった。そして、マレー人範疇の形成過程におけるインド系ムスリム住民の位置づけの変化を通じて、マレー人範疇の固定化が移民集団である華人・インド人との差異化において進行してきた故に、その狭間に位置した人々にとって、マレー人範疇の外縁が曖昧なまま推移してきたことを論じた。以下では、本稿の内容を改めてまとめたい。

そもそもマレー人とは、その初期においては王権の階層秩序とイスラームの宗教共同体に基づく開放的で流動的な集団概念であった。こうしたマレー人概念は、植民地期以降、人口調査や民族別政策といった植民地行政下での華人・インド人といった他集団との差異化、また植民地政府からの「名づけ」や当地人たちからの「名乗り」を経て徐々にその流動性を失い、近代的

23) 松田 [1992] は、生活するうえで必要な妥協、服従、協力、抵抗といった小集団の戦略に基づく柔軟な民族意識を「ソフトな民族」、植民地支配や近代国家制度の下でその領域を定められ固定化した民族分節を「ハードな民族」と区別している。この点においてインド系ムスリム住民にとってのマレー人はいわば「ソフトな民族」に近いものであり、松田の論点を踏まえると、今日のマレー人は「ソフトな民族」と「ハードな民族」の二面性を備える民族概念であるといえる。

な民族範疇へと変化していった。そして戦後はマレー人の優位が確立し、マレー人は法的な地位として、他集団の間で明確に区別されるものとなった。

植民地統治期以前より当地域に流入していたインド系ムスリムたちは、マレー王国の時代はクラジャアンの下でマレー人概念に包摂されていた。また植民地統治期には、イギリスが直接支配する海峡植民地でマレー語とイスラームを通じたマレー人意識を獲得し、植民地行政下でマレー人・華人・インド人という民族範疇が形成されていく過程で、自らをマレー人側に位置づけていった。1930年代にマレー人ナショナリズムが活発化すると、彼らによるマレー人性の主張はその血統や出自を理由に批判の対象となった。その一方で、戦後のマラヤにおける政治体制の転換がナショナリズムの方向性を変化させると、彼らの存在は再びマレー人範疇に包摂され得るものとなった。そして、国民国家建設の時代から現代に至るまで、三大民族の住み分けを前提とした政治制度が確立していく過程においても、彼らはその都度の状況に応じて自らのマレー人性とインド人性を使い分けながら、インド系ムスリムとしての発言の場を確保してきた。

このような彼らの位置づけの変化からは、植民地行政の浸透と共に始まったマレー人概念の固定化が、「土着民」たるマレー人と移民集団たる華人・インド人との間の区別において進行した故に、境界に立つインド系ムスリムにとってのマレー人範疇の外縁が一定の透過性をもつものとして推移してきたということが示唆された。無論、民族範疇としてのマレー人が形作られた植民地期と、それが法的地位として確立した独立以降とでその度合いが低下したことは事実である。しかし、本稿で論じたインド系ムスリムの事例からは、マレー人が近代化と共にその本来的な流動性を失いつつも、植民地期と独立を経て現在に至るまで、その流動性が働く一定の余地を残すものとして存在してきたという変遷の過程が読み取れるといえるだろう。

最後に今後の課題について述べておきたい。本稿では、彼らをマレー人/インド人の境界にあると位置づける一方で、インド人の多数派を占めるタミル系ヒンドゥー教徒との関係性については言及出来なかった。また、南インドにルーツをもつムスリムを広くインド系ムスリムと括ったうえでその歴史的変遷を概観したため、出身地域や移動時期によって微妙に異なる集団内部の多様性についても言及出来なかった。加えて、彼らと同様にマレー人範疇の周辺に位置づけられてきた集団として外来マレー人²⁴⁾やアラブ系のムスリムが挙げられるが、そうした集団とインド系ムスリムとの比較といった重要な視座も議論に含めることが出来なかった。今後は以上の点を視野に、現地調査を通じた当事者の語りも含め、境界に立つ彼らとマレー人社会との関係性をより立体的に描くことを試みたい。

24) 注16を参照。

謝 辞

本稿は、同志社大学グローバル地域文化学部に提出した2021年度卒業論文の一部に加筆修正をしたものである。卒業論文の執筆において貴重なご助言をいただいた、当時の指導教員である王柳蘭先生、並びに、卒業論文執筆時より度々相談に乗っていただき、本稿の執筆と投稿を後押ししてくださった現在の主指導教員である片岡樹先生に、この場を借りて厚くお礼申し上げます。誠にありがとうございました。

引用文献

日本語文献

- 井口由布. 2018. 『マレーシアにおける国民的「主体」形成—地域研究批判序説』彩流社.
- 石川 登. 1997. 「民族の語り方—サラワク・マレー人とは誰か」『民族の生成と論理』岩波講座文化人類学5. 岩波書店, 135-163.
- 内堀基光. 1989. 「民族論メモランダム」田辺繁治編『人類学的認識の冒険—イデオロギーとプラクティス』同文館出版株式会社, 27-43.
- 加藤 剛. 1990. 「『エスニシティ』概念の展開」坪内良博編『東南アジアの社会』講座東南アジア学3. 弘文堂, 215-245.
- 左右田直規. 2018. 「植民地史の換骨奪胎」小泉順子編『歴史の生成—叙述と沈黙のヒストリオグラフィ』地域研究叢書33. 京都大学出版会, 109-151.
- 多和田裕司. 2005. 『マレー・イスラームの人類学』ナカニシヤ出版.
- 田村愛理. 1991. 「誰がマレー人か—マレーシアの人口統計からみたマレー人概念の成立と国民国家」『調査研究報告』23: 26-44.
- 坪井祐司. 2011. 「英領マラヤにおけるマレー人概念の土着化」『東洋学報』93(2): 246-221(01-026).
- . 2013. 「英領マラヤにおけるマレー人像の相克—スランゴール州における対マレー人土地政策の展開」『マレーシア研究』2: 72-87.
- . 2016. 「1930年代初頭の英領マラヤにおけるマレー人性を巡る論争—ジャウィ新聞『マジュリス』の分析から」『東南アジア—歴史と文化』45: 5-23.
- 富沢寿勇. 2003. 『王権儀礼と国家—現代マレー社会における政治文化の模型』東京大学出版会.
- 鳥居 高・竹下秀邦. 1996. 「マレーシア連邦憲法 [解説と翻訳]」『重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ—総合的地域研究の手法確立—世界と地域の共存のパラダイムを求めて』24: 24-160.
- 中原道子. 1980. 「解説」アブドゥッラー著, 中原道子訳『アブドゥッラー物語』平凡社, 288-303.
- 弘末雅士. 2004. 『東南アジアの港市世界』世界歴史選書, 岩波書店.
- 松田素二. 1992. 「民族再考—近代の人間分節の魔法」『インパクション』75: 23-35.
- 水島 司. 1998. 「移民・コミュニティ・国民統合—マレー半島のインド人」松本宣郎・山田勝芳編『移動の地域史』地域の世界史5. 山川出版社, 256-284.
- 吉野耕作. 2002. 「エスニズムとマルチエスニシティ—マレーシアにおけるナショナリズムの2つの方向性」小倉充央・加納弘勝編『講座社会学16 国際社会』東京大学出版会, 85-119.

英語文献

- Chuah, Osman Abdullah, Abdul Salam M. Shukri and Mohd Syukri Yeoh. 2011. Indian Muslims in Malaysia: A Sociological Analysis of Minority Ethnic Group, *Journal of Muslim Minority Affairs* 31(2): 217-230.
- Duruz, J. and C. G. Khoo. 2015. *Eating Together: Food, Space, and Identity in Malaysia and Singapore*. Malaysia: Strategic Information and Research Development Centre.
- Fujimoto, H. 1988. *The South Indian Muslim Community and the Evolution of the Jawi Peranakan in*

- Penang up to 1948*. Tokyo: Tokyo Gaikokugo Daigaku Press.
- Hirschman, C. 1987. The Meaning and Measurement of Ethnicity in Malaysia: An Analysis of Census Classifications, *The Journal of Asian Studies* 46(3): 555–582.
- Khoo, Salma Nasution. 2009. The Tamil Muslims in Early Penang: Networks for A New Global Frontier. In Wazir Jahan Karim ed., *Straits Muslims: Diasporas of the Northern Passage of the Straits of Malacca*. George Town: Straits G. T., pp. 97–120.
- _____. 2014. *The Chulia in Penang: Patronage and Place-Making around the Kapitan Kling Mosque 1786–1957*. Malaysia: Areca Books.
- Milner, A. 1982. *Kerajaan: Malay Political Culture on the Eve of Colonial Rule*, Tucson: University of Arizona Press.
- _____. 1998. Ideological Work in Constructing the Malay Majority. In Dru C. Gladney ed., *Making Majorities: Constituting the Nation in Japan, Korea, China, Malaysia, Fiji, Turkey, and the United States*. The United States: Stanford University Press, pp. 151–169.
- _____. 2002(1995). *The Invention of Politics in Colonial Malaya*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Nagata, Judith. 1974. What is a Malay? Situational Selection of Ethnic Identity in a Plural Society, *American Ethnologist* 1(2): 331–350.
- _____. 1984. *The Reflowering of Malaysian Islam: Modern Religious Radicals and the Roots*. Vancouver: University of British Columbia Press.
- _____. 2006. Religion and Ethnicity among the Indian Muslims of Malaysia. In S. K. Sandhu and A. Mani eds., *Indian Communities in Southeast Asia*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies, pp. 513–540.
- Omar, A. 2015. *Bangsa Melayu: Malay Concepts of Democracy and Community 1945–1950*. Second edition. Malaysia: Strategic Information and Research Development Centre.
- Pillai, P. 2015. *Yearning to Belong: Malaysia's Indian Muslims, Chitties, Portuguese Eurasians, Peranakan Chinese and Baweanese*. Singapore: ISEAS-Yusof Ishak Institute.
- Roff, W. R. 1994. *The Origins of Malay Nationalism*. 2nd edition. Kuala Lumpur: Oxford University Press.
- Shamsul, A. B. 1996. Debating about Identity in Malaysia: A Discourse Analysis, *Southeast Asian Studies* 34(3): 476–499.
- Shankar, A. R. 2001. *Tamil Muslims in Tamil Nadu, Malaysia and Singapore: Historical Identity, Problems of Adjustment, and Change in the Twentieth Century*. Kuala Lumpur: A. Jayanath.
- Stark, J. 2006. Indian Muslims in Malaysia: Images of Shifting Identities in Multi-ethnic State, *Journal of Muslim Minority Affairs* 26(3): 383–398.
- Vlieland, C. A. 1932. *British Malaya: A Report on the 1931 Census and Certain Problems of Vital Statistics*. London: Crown Agents for the Colonies.

新聞記事

Malaymail. 2021 (November 7). <<https://www.malaymail.com/news/malaysia/2021/11/07/melaka-polls-parti-perikatan-india-muslim-nasional-to-field-sole-candidate/2019110>>

マレーシア・センサス (MC : Malaysian Census)

MC. 2010. Population Distribution and Basic Demographic Characteristics 2010. Table 4.1: Total population by ethnic group, religion, sex and state, Malaysia 2010. Putrajaya: Department of Statistics.